

# 多文化共生に関する シンポジウム

入場無料

定員190名  
先着順

と 2014年6月10日(火) [12時30分開場]  
き 13時～17時

同時通訳付  
日本語・英語

と 同志社大学 今出川キャンパス 礼拝堂(チャペル)  
ころ

## 多文化共生社会における普遍的価値観の共有

現在、宗教的対立や経済的不平等が阻害要因となり、国際協調が様々な領域で困難となっている。また途上国における人口爆発が水資源の不足や食料枯渇を引き起こし世界的規模の気候変動による大規模災害のリスクも増大している。

このような状況において、文化的・宗教的対立を乗り越えた普遍的価値観を共有し様々な危機的問題の持続可能な解決に取り組むことが次世代の為に急務である。

普遍的価値観の共有には異なる文化・宗教間の相互理解が必須であり

そのために教育というものが大きく貢献する。

本シンポジウムでは、このような文化的・宗教的対立を超える普遍的価値観を明確化し国際協調による様々な国際問題への解決を促進する提言をおこなう。

■プログラム 13:00～15:55 パネリストによる発表(14:20～14:35に休憩)  
16:10～17:00 パネルディスカッション

■パネリスト **Stephen Hill** (Emeritus Professor, University of Wollongong, Australia)  
**Philippe Delanghe** (UNESCO Office, Phnom Penh, Cambodia)  
**Gavin Parker** (Professor, University of Reading, UK)  
**Serrano Sianturi** (Professor, Sacred Bridge Foundation, Indonesia)  
**Stomu Yamash'ta** (Artist, Kyoto, Japan)

■コーディネーター 同志社大学 経済学部 教授/創造経済研究センターセンター長 河島 伸子

■司会 同志社大学 創造経済研究センター 特別研究員(PD) Grace Gonzalez

■実施責任者 同志社大学 経済学部 教授 八木 匡

■主催 同志社大学創造経済研究センター

■共催 同志社大学博士課程教育リーディング・プログラム グローバル・リソース・マネジメント(GRM)  
同志社大学ライフリスク研究センター

■協力 株式会社 サウンド・コア

■後援 京都府 京都市

国際社会における連携を可能にする  
文化的、宗教的資源管理に関するシンポジウム  
—多文化社会における共通価値の共有—

同志社大学創造経済研究センター  
St CORE 研究会 主催  
同志社大学グローバルリソースマネジメント 共催  
ライフリスク研究センター 共催

2014年6月10日

於 同志社大学礼拝堂

## 文化ルーツと創造的営みの普遍性 — 日本文化の本質と精神性の含意 —

ツトム・ヤマシタ  
(同志社大学創造経済研究センター  
St. CORE研究会チーフディレクター)

日本人の感性と美意識のルーツを探ることは、現代の日本人が世界の中で尊厳を得て日本人としてのアイデンティティを明確化する上で重要である。また、美意識と感性が形成されるプロセスにおいて、宗教性が重要な役割を果たしてきた事も十分に認識しておく必要がある。

古代からその時代の先端を切り開いてきた人々にとってこれらの関係性は長年にわたってある種のコード体系を引き継ぐことによって伝播してきたと考えられる。コードは関係性の本質を体現したものであり、コードを理解できた者のみが、その時代の知識体系を正確に理解できたと考えられる。

例えば、ダン・ブラウンのダヴィンチコードで用いられた聖杯は、知識と思想体系の裏に隠されたコードを象徴するものである。そこでのコードは、思想性および宗教性における本質にたどり着くためのキーワードの集合であり、その解釈は聖杯という象徴によってヒントが与えられている。このコードを基に、我々日本人のコードを探ってみた。すると、1つの大きな発見がある。

それは1300万年前の刻を経て、日本の大地に存続してきた石、サヌカイトである。太古の時代には、鎌（やじり）、ナイフ等として、生活の営に使用されてきた鉱物が、石器、青銅器時代を経て、デジタル時代の今、楽器として蘇った事実である。

サヌカイトの音によって作り出される空間は、日本における宗教性の本質がどのようなものであったかを体感させるものである。サヌカイトの音が生み出す波動の紋様は、古代の思想性と宗教性を内包するコードであると言って良いであろう。このコードは、『音禅法要』の声明と儀式によって表現されたキーワードによって意味を付与することとなる。サヌカイトの生み出す音の波動は、物理的なりアリティを伴って、日本文化のルーツを現代の人々にインスパイアする。

今、日本人にとって求められていることは、日本人の霊性から生まれる精神性と感性、美意識の秀逸性を再確認することである。

これは自然界と共生する中で育まれた日本人の精神文化の根源である。

このことにより、日本人が営む創造的活動は、継続的に社会的共感と社会に対するインスピレーションを提示することに繋がる。これは、市場経済においては、市場価値の高いイノベーションを生み出す社会的土壌を醸成する作業である。

精神的営みをより美しく、そして清らかにしていくことは、創造的活動の普遍性を高めることにつながる。これは人間に本来備わっている「直感」という全体把握能力を最大限に活用しなければ達成できない問題であるからである。

例えば、遺伝子工学によって生み出された抗ウイルス薬が、人間が本来有している生体システムの安定性を危険にさらす場合には、価値の長期的普遍性は低いと評価される。

古代より自然との共生を基礎とした日本の精神活動において、「美」と「清」は常に中心的課題であった。古代よりこの2つの要素が持つ本質的意味を、神仏習合の中からコード体系として様々な象徴が生まれ、伝えられてきている。祭りにおける音の波動と儀式はその典型であるが、多くの日本人は無意識のうちに祭りと儀式を通じてコードを体得してきたといえる。音は波動として、人々の体に吸収されていき、脳に伝播され、思考における美的意識を喚起することとなる。美しい波動は、思考における「美」を無意識のうちに高めることとなる。逆に、ノイズは、人々の思考を混乱させる要因となり、システム全体の合理性を低める要因となる。欲望によって引き起こされる邪悪な行動は思考を歪め、普遍的価値を低下させ、全体合理性を低める。冷徹なまでに貫徹するこの事実を人類は繰り返し経験してきているにも関わらず、悲劇は終わらない。

哲学を持たない芸術、そして哲学を持たない科学。この両者が暗示する未来とは、魂がぬけた肉体、つまり抜け殻の生物が形成する社会を意味する。

人類はどこに向かって行くのか・・・

# シンポジウム趣旨

## 多文化社会における紛争解決のための共通価値の共有

現在の国際社会は、グローバリズムの長期的な深化を背景として、異なった宗教観での紛争、国際的にも国内的にも不平等化する社会といった深刻化する課題に直面している。途上国における人口爆発の問題も、水資源、食料不足、地球環境悪化、気候変動、自然災害といった問題と結びつきながら、解決が求められている。

人類は、将来に亘って、世界の人々が幸福に生きることができるよう、これらの課題を解決する必要がある。これらの問題に対する持続可能な解決方法として、世界の人々が共有できる共通価値を探し求めることが考えられる。思想、宗教の相違に基づく不信に根ざした紛争は、環境破壊、破滅的な生活条件を引き起こす最悪の要因であると言って良い。人類が共有できる共通価値を見だし、それをを用いて相互理解を促すような教育を付与していくことも重要であろう。

共通価値の共有は、グローバル化した社会における様々な問題を解決するために実施する政策の有効性を高めるとも考えられる。例として、児童労働の問題を考える。就学期の子供を就学させず、労働力として用い、家計収入源にすることは、人口爆発を引き起こす経済的要因の一つとなっている。教育を受けていない子供は、長期的に稼得能力が低く、それが貧困問題を悪化させ、それが人口爆発の経済的要因を悪化させるという悪循環を引き起こしている。このような児童労働の問題を解決することは、人口爆発を抑える上で重要な経済的政策と考えられるが、政策の有効性は人々の価値観に依存することとなる。共通価値を認識し、理解することにより、政策の必要性を理解することが可能となり、政策の有効性は高まると考えられる。

本シンポジウムの目的は、人類が共有できる共通価値を明確化し、国際社会が直面している困難な課題を解決し、危機を乗り越える英知を生み出すことである。

# 報告要旨

## 「聖なる沈黙」

**Emeritus Professor Stephen Hill, AM  
University of Wollongong  
AUSTRALIA**

「聖なる沈黙」は多様な文化を越えたコミュニケーションと「聞くこと」の必要性に焦点を当てている。「沈黙」は、他者の普遍的な人間性に関する神聖性に耳を傾け、それを理解するための扉である。聞くことは、他者の主張を遮るためではなく、あくまでも理解するための扉である。

他者の文化を理解し、尊重することは、有形および無形の遺産を保全し、異文化理解と集団的行動を起こすためのプラットフォームを提供する。全体主義的な体制が、過去に存在した別の体制の名残を破壊することは自明である。彼らは「過去に耳を傾ける力」を排除するのである。

特に音楽、ダンス、パントマイムや芸術に見られるように、意思疎通するための非言語的表現力を認識することにより、私たちは瞬時に現実世界から離れ、神聖性と人間性の本質への扉を開くために、文化的な境界を越えて、感性と人間的な絆を求める。これが非言的沈黙の力である。

しかしながら、私たちは刹那的な主観世界において意味を見いだすことを考え、それ以外のコンテキストでの意味づけを行う作業を意図的には行わない。私たちが現在生きている「グローバル」社会の範疇において、底辺に流れているものの、何の検証もされていない文脈と意味の表現形式と、私たちが生きている刹那的世界にある文化とが、相互に作用し合うこととなる。私たちの個人的なアイデンティティと行動力は、私たちにとって意味を付与できるものに基づいている。私たちは、従業員、家族の一員、宗教信者等として存在している社会において規定されている様々なローカルルールの範疇において、そのルールに意識的に従うことになるが、私たち自身が付与する意味は、そのルールに統合されて発現されていく。他者との紛争および搾取は、他者の存在を抽象的に捉え、ある距離を持って認知することから生まれると言って良い。したがって、社会を変革する力は、私たちの手の届く世界の範囲に存在することとなる。

それゆえ、共通の価値観に基づいた普遍的な理解を築くための最も有効な行動戦略は、「ローカル」に焦点を当て、他者との連携を構築するために、私たちが意味を付与できる世界を拠点に、音楽等の非言語的表現を交えた集団的行動を行うことである。「聖なる沈黙」のビジョンを通じたリーダーシップは、ローカルから出発した相互理解と意思疎通を基盤に発揮される必要があるのである。

ヒルズ教授の論文は、自己意識と知識の現象学に関する学術研究を基礎として、新興アジア経済のための開発政策について書かれたものであり、50年間に亘る実務経験に裏打ちされている。彼の京都シンポジウムでのプレゼンテーションでは、十年以上に亘ってユネスコで進めてきたプログラムをスタートさせ、そして運営を指揮した実務経験を通じて明確化した、国際連携のための共通価値の共有と普遍的価値の理解といった原理に基づく「聖なる沈黙」の概念を提示するものである。

## 世界遺産と平和：カンボジア・アンコールの例

**Philippe Delanghe**  
**Culture Programme Specialist**  
**UNESCO, Phnom Penh, Cambodia**

1991年のパリ協定の後、カンボジアの故国王であるシアヌーク陛下は、ユネスコに対して、アンコール遺跡の保存のための重要な宣言を行った。その後、1992年にアンコールは滅亡の危険にある世界遺産としてリストに登録され、1993年には、アンコール遺跡のために第1回政府間会議が東京で開催され、アンコール遺跡保存のための「国際調整委員会（ICC-アンコール）」の設立につながっていった。この委員会には、日本とフランスが議長国となりユネスコが事務局を提供している。

それ以来、ICC-アンコールは、技術会議と本会議が半年ごとに招集され、そこではアンコール遺跡の保存のためのプロジェクト開発、進捗状況や保存方法について、国際的レベルで意見交換が行われてきている。その結果、2004年には、アンコール遺跡は危機に瀕した世界遺産リストから除去され、「世界遺産リストへの登録」に成功している。

2013年12月には、アンコール遺跡のための第3回政府間会議がシェムリアップで開催され、カンボジアのICC-アンコール、および20年間に亘るアンコール遺跡の保護と開発のための国際協力の成功を祝う20周年記念日を迎えた。現在、16の国と37のプロジェクトが、国内および国際的なレベルで、アンコールにある考古学公園を舞台に進められている。議論は、持続可能な開発、地域社会の関与、生き続けている無形遺産の重要性に関して、純粋な考古学、再生および保全問題の見地から国際的なパートナーと共に続けられてきている。

ICC-アンコールは、このように、遺産の管理を通じて、カンボジアの和平プロセスに貢献してきたし、国際協力と相互理解がもたらした成功例として見ることができる。



## 都市計画と多文化社会における紛争解決に対する貢献可能性

**Professor Gavin Parker**  
**University of Reading, UK**

現代の都市計画は、生活の質を向上させる手段として 19 世紀に考案され、建築、交通システム、公園等の公共資源のあり方を設計することにより、人々の生活のあり方およびインフラのあり方を示してきた。時が経過し、都市計画においては、紛争を解決し、多くの人々が生活を楽しみ、それらを共有できる方法を議論することが成功のための主要な鍵となってきた。これらの成果は、経済および環境においてのみならず、社会的、文化的側面において見いだすことができる。したがって、この報告では、何のために、どのように都市計画を策定するかに焦点をおいて議論することとする。人々の都市における活動をデザインし、都市機能を活用する方法を検討するだけでなく、都市の未来に対してどのような視点を持ち、どのように人々に関わって頂くのかを議論することが重要である。多文化で多様性の高い社会の中で、都市計画者が直面する課題はより挑戦的なものとなる。その焦点は、近隣計画を含む、交渉プロセスと協調プロセスを含んだ計画に置かれ、多文化社会における矛盾を克服するための相互理解を可能にし、開発プロセスでの支援を可能にするプロセスと成果に関する考えを提示する。

## Cultural Dynamics: between Commonality and Diversity

文化動態：共通性と多様性を踏まえて

Serrano Sianturi

Chairman of Sacred Bridge Foundation

Jakarta, Indonesia

### 文化：循環と動態

文化は循環的である。それは、人間、神の概念、そしてそれらを取り巻く環境が相互に結びついた時に誕生した。その後、この3角形の関係性により、象徴、価値観、規範、信念、慣習、伝統と親和性のある文化的な構成要素が与えられたのである。これらの構成要素は、相互関係のメカニズムが確立され、実践される方法の根幹となる思考と振る舞いのパターンを形作る。これらのメカニズムを通じて生み出される結果および発露は、内적および外的に、構成要素に対して反応したものである。これらの反応は、現在の慣行を攪乱し、変革をもたらす循環（三角関係、システムの集合、思考パターン、メカニズム）の内にあるいかなる部分に対しても、疑問を再提示することとなる。このシステムの全体的動きによって、文化に循環性と動的要素をもたらす疑問の再提示が行われるのである。現在の慣行に対して疑問を再提示し、その疑問をいかなる形で人々に示すかが、将来を形作る上で重要な役割を果たすこととなる。

### 相互連関のメカニズムと相互連関におけるアプローチ

私たちがすでに認識し、実際にその中で生活しているように、文化は、個人、グループ、地域社会や国家が相互作用するいくつかの相互関係のメカニズムを内包している。これらの相互作用を介して、私たちはしばしば、2つの判断基準が存在するような状況に直面している。私たちが学び、新しいものを採用する一方で、私たちはまた、（意図的にまたは意図せずに）他者に対して私たちの関心を強要し、そのような強要によって長期に亘る修復困難な（文化的）損害をもたらすことになる。

上記で述べた相互関係のメカニズム（イデオロギー/政治、言語、経済、技術、民族的特性や美的発露）は、生き残るためのニーズを満たすために、異なる文化の間での交流に用いられる手段として機能している。交流自体は、実際には中立的概念であり、双方にとって利益となる場合もあれば、傷つけ合う場合もある。交流の様態は、どちらの立場で進めるかによって異なったものとなる。実際には、交流は異なる特性を示しながら進められる。第1は、他者との価値観の共有が可能な形態であり、第2は価値観の対立、そして第3は他者を支配するアプローチである。どのアプローチが選択されるかは、それぞれのアプローチがもたらす収益の大きさに依存することになる。経済学において、このようなアプローチは、功利主義的アプローチと呼ばれている。

### 文化と相互関係メカニズムとの間における互惠的連関：複線的動態から単線的動態へ

この世界において、普遍的事実は、世界は常に変化していることであろう。我々の団体、Sacred Bridge Foundationにとって、変化すべきものと、変化すべきではないものがあるということが重要となっている。自然界での摂理を別として、過去何千年にも亘る人類の歴史においては、行為と意思決定の帰結としてもたらされてきた変化は予測しがたいもので

あった。多くの場合、人類がもたらした発明および発見は、解決が困難な問題を引き起こしてきた。これらの発明のほとんどは、前述の相互関係メカニズムの内側から生まれてきたものである。過去 20 年間で、経済や技術は、グローバルな変革をもたらしてきた2つの相互関係の支配的メカニズムであり、これらは今日の変化する文化に重大な影響を与えてきた。

倫理および文化経済学に焦点を当ててきた経済学者にとっての警鐘は、経済と技術が世界の発展を支配してきたという事実だけでは無く、大多数の人々が経済と技術という2つの相互連関のメカニズムをどのように認識し、それを動かしてきたかである。経済学は、生産—分配—消費という問題に関心が狭隘化していると言えよう。富は、物的な資産の蓄積によって測られ、生活の質の改善は経済指標に含まれてきていない。経済状態の把握は、生産と消費を軸に行われ、人間中心のものとはなっていない。大凡すべてのものが、お金を生み出すために進められ、人生を豊かにするための議論がなされてきていない。経済学の用語は、市場での取引と市場価値、そして利益と便益という内容に矮小化されていると言って良いであろう。それによって、思考の範囲も矮小化され、人生の生き方を変えるものとはなっていないのである。

創造的活動も、機能的にも美的にも商品化されている。所謂「創造経済」とか「文化産業」は、文化および経済の中での想像力、創造性、発明と関連性を有していない。その代わり、拙速に創造的であるか否かの判断が下される傾向にある。そしてその創造性は、どれだけお金を生み出すのかによって、評価されることになる。

技術に関して言えば、デジタル技術の発展により、世界はより便利になり、様々な情報を瞬時に、また容易に入手できるようになった。デジタル技術を発明した先進国は、それによって更なる成長が可能となり、それを使う国ではデジタル技術によって即時的反応を習慣づけられるようになった。それにより、技術を生み出す国と消費する国とのギャップは拡大している。しかし、これらの技術を利用する消費者は、発明の裏にある文化的意味合いを理解することなく、その技術に依存する状況となっている。そのため、技術を利用する目的が、本来の目的から乖離することになるのである。

## 共通性と多様性

異なった文化との間での交流と対話を議論する場合には、相互に敬意を払い、革新的な部分での相互理解が必要となる。実際には、個々の利害要因により、このような理想的原則は打ち破られることとなる。共通性は、他者との類似性または同等性と言って良い。多様性は、その反対に、人々の間での差異となる。共通性は他者との絆を強め、多様性は異なった部分を繋げる架け橋としての意味を有する。常識的には、共通性よりも多様性が他者との緊張と紛争を潜在的にはもたらすこととなる。そのため、多様性をむしろ異なった文化をもつ国々を相互に高めるように活用する方法を考えることが重要な課題となるのである。その重要な鍵となるのが、差異の中での融和可能性を認識することである。

共通した慣習は、大多数によって合意されたものと一般的には認識されている。そして、それが現実を形成することとなる。私が行った 15 年間のフィールドワークの中で、共通した慣習は必ずしも常識に立脚しているのではなく、人々が直面している課題について何

かを語っている分けでも無いことが分かってきた。共通した慣習は、実際には非現実的側面を有するのである。そのため、共通性は時には最も適切な行動では無く、それ故に、私たちが守るべきものでも無いのである。